第一章　朝顔姫君の物語　藤壺代償の恋の諦め

［第一段　故藤壺の一周忌明ける］

*年変はりて、宮の*御果ても過ぎぬれば(中宮の一周忌法要も終わったので)、世の中色改まりて(宮中の服の色も喪服から平常に戻って)、更衣(ころもがへ、夏服への衣替え)のほどなども(の色柄なども)*今めかしきを(目新しく華やぐのを)、　*注に＜前の「朝顔」巻の翌年、源氏三十三歳の正月。＞とある。　*「果て」には＜一周忌＞の意味がある、とのこと。ただ、「過ぐ」は＜経過する、終わる＞という感じで、忌が＜明ける＞よりは法要が＜終わる＞ほうが馴染む気がする。注には＜藤壺の一周忌をさす。崩御は前年三月。＞とある。　*「今めかし」は＜新しく派手である＞と古語辞典にある。

まして*祭のころは(まして葵祭の四月の中頃は)、おほかたの空のけしき心地よげなるに(大方の空模様も初夏の清々しさなのに)、前斎院はつれづれと眺めたまふを(前斎院は父宮の服喪のまま力なく庭を眺めていらっしゃって)、前なる桂の下風(手前に植えてある桂の枝を抜けてくる風が)、なつかしきにつけても(往時を偲ばせるので)、若き人びとは思ひ出づることどもあるに(若い女房たちは宮の御在職中の賀茂祭の華やぎをあれこれ思い出す事もある時に)、大殿より(おほとのより、内大臣から)、　*「まつり」と言えば、当時の宮廷に於いては賀茂祭すなわち葵祭を言ったらしい。およそ、夏祭りは天変地異の鎮守と豊作の祈願祭であり、秋祭りは感謝祭なのだろう。

「御禊の日は(今年のみそぎの日は)、いかにのどやかに思さるらむ(服喪の為に退下為さったので、さぞ穏やかにお迎えのことでしょう)」

と、訪らひきこえさせたまへり(ご機嫌伺いのお便りが届けられて、次の歌が添えられていました)。

「今日は(でもせめて、この日は)、

かけきやは川瀬の波もたちかへり、君が禊の藤のやつれを」(和歌 21-01)

長年の功も有るのだし、お清めをしては如何ですか」(意訳 21-01)

*注に＜源氏から朝顔姫君への贈歌。「き」過去助動詞、終止形。「やは」連語、反語表現。「藤」（藤衣＝喪服）と「淵」の掛詞。「淵」「河瀬の波」「禊」は縁語。＞とある。良く分からない説明だ。特に、初句の「かけきやは」はこの歌の主題だろう。で、その「やは」は＜その(や)うに(は)＞であり、後ろに＜ならない＞や＜ならないだろうか＞が暗意されている語かと思うが、此処では＜ならない＞という反語表現ではなく、＜ならないだろうか＞という願望表現に違いない。何故なら、＜そのやうには＞の＜そのやう＞は「かけき」だが、その「かけき」は「君がやつれを」「たちかへり」という相手の判断に規定された相手自身の行動であり、それを歌で他人が否定することに何の意味も成立しないからである。というこの説明も面倒だが、この歌の筋は多分こうだ。即ち、「今日は(今日は御禊の日なので)君が藤のやつれを裁ち替へり(斎院だった貴方は御父宮の為の喪服を着替えて)禊の川瀬の波も掛け来やは(お清めに川で手を洗って来たら如何ですか)」という、この御禊の儀の日を前にして未だに喪に服している前斎院に対してならではの洒落た慰めなのだろう。掛詞は、「かはせのなみ」は＜御手洗川の浅瀬の波＞と＜浮世の常＞、「た

ちかへり」は＜衣替え＞と＜思い返し＞、「ふぢのやつれ」は＜着古した喪服＞と＜深みの淵のように斎院を長年勤めた疲れ＞、なのだろうか。そして「かけきやは」は、主題の「掛け来やは(水を掛けて清めて来てはどうですか)」で「川瀬の波」に掛かり、「懸けきやは(～と考えてみては)」で「立ち返り」に掛かり、「掛け着やは(～着てみては)」で「裁ち替へり」に掛かる。などと言葉を労すると面倒だが、恐らく当時の人々にとっては日常語として、労無くこの歌を味わったのだろう。

紫の紙、*立文すくよかにて(立文の正式な形で)、藤の花につけたまへり。　*「立文(たてぶみ)」は＜書状の形式の一。書状を礼紙(らいし)で巻き、その上をさらに白紙で包んで、包み紙の上下を筋違(すじか)いに左、次に右へ折り、さらに裏の方へ折り曲げるもの。折り曲げた部分を紙縒(こより)で結び、表に名を記す。捻(ひね)り文。＞と大辞泉にある。文字では分かり難いが、古語辞典に図があって、時代劇でよく見る御上の書状形式のことらしく、今の祝儀袋とほぼ似た様式だ。

折のあはれなれば(立て文の折りの礼儀正しさと、祭に先立つ斎院の御禊の日折りの間の良さに心が動いたので)、御返りあり(前斎院から御返歌が、)。

「藤衣着しは昨日と思ふまに、今日は禊の瀬にかはる世を　(和歌 21-02)

「つい昨日かと思う間に、何と月日の早いこと　(意訳 21-02)

*注に＜朝顔の返歌。「藤のやつれ」を受けて「藤衣」と返し、「禊」「瀬」はそのまま用いて返す。「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」（古今集雑下、九三三、読人しらず）「飛鳥川淵にもあらぬ我が宿も瀬にかはりゆくものにぞありける」（古今集雑下、九九〇、伊勢）を踏まえる。無常をいう。＞とある。古今集の歌の解説は Web サイト「古今和歌集の部屋」に頼り切っているが、今回も特に 990 番の伊勢の歌の解説は非常に参考になった。お陰で「瀬になる」や「瀬にかはる」の語用に、変化の＜無常＞だけでなく、変化の＜妙＞も意図されていた事を知った。深い意味とも言えそうだが、結構駄洒落の語感で冗談や軽口めいた明るさ、は有りそうだ。だからこそ深い。そして、そういう歌こそが、意味を拾って言い換えても、実は意味を成さない。だから、この歌も言い換えは無効だが、それを承知で取り繕う。為に少し整理する。この歌の構文は「岸は昨日と思ふ間に」「今日は瀬に変はる世を」で、其処に「ふぢごろもきし」の＜父の死を知って喪服を着た＞と「みそぎのせ」の＜清めの洗い＞という洒落言葉での対比を織り込むという完成度の高さで、まるで光君の贈歌がこの歌の呼び水だったと思えるほどだ。が、それでもこの歌は多分、光君の助言を受け入れて、昨日までで服喪を終えて今日からは平常に戻ります、と素直に答えている事には成りそうだ。いろいろあったが今回は、礼儀正しく斎院の功績を評価するかのような内大臣の挨拶を、朝顔君は好感したのかも知れない。尤も、全く勝手に服喪を切り上げる事は出来ないのだろうが、親だからといって必ずしも一周忌までとは限らなかったかと思われる。というのは、桃園式部卿宮が亡くなったのは、中宮の四十九日法要後のことであり、中宮は昨年の三月に亡くなっているので、絶対ではないが命日は四月よりは五月の公算が強く、まして今は四月中旬なので、まだ父宮の一周忌前と思われるからだ。だから、正に内大臣の助言として、斎院を勤めた朝顔君なら、御禊の日を前にして服喪を終えるというのは対外的な妥当性もあったのではないだろうか。いやむしろ、国事として中宮の一周忌法要を三月に終えていたのだから、国体に従うという意味合いも有ったとすれば、光君の挨拶は助言ではなく内大臣としての勧告だったのかも知れない。なるほど、勧告とみれば光君の「かけきやは」の語感も印象が変わって、立文の体裁も納得できる。

はかなく(無力です)」

とばかりあるを、例の(例によって光君は)、御目止めたまひて見おはす(じっと目を止めて御覧になっていました)。

御服直しの(おんぶくなほし、喪服から平常衣への着替えの)ほどなどにも(際などにも)、宣旨のもとに(女房の宣旨宛てに)、所狭きまで(所狭しと)、思しやれることどもあるを(光君からお見舞いの品々が多数お贈り下されてきたのを)、院は見苦しきことに思しのたまへど(朝顔君は見るのも負担に思い口にも為さったが)、

「をかしやかに(気取った体裁の)、けしきばめる御文などのあらばこそ(恋文らしいお手紙などが添えられてあったなら)、とかくも聞こえ返さめ(何とか申して送り返せもしますが)、年ごろも(この数年来)、おほやけざまの折々の御訪らひなどは(お役目柄の季節ごとの贈り物などは)聞こえならはしたまひて(ずっと送り下されていて)、いとまめやかなれば(今回もとても形式ばったものなので)、いかがは聞こえも紛らはすべからむ(どのように申してもそうした下心のある贈り物と紛らわしいとして送り返すことなど出来ません)」

と、*もてわづらふべし(宣旨もどうしたものか困っていたようです)。　*注に＜推量助動詞「べし」は語り手の推量。宣旨の心中を忖度。以下の物語展開を興味深々たるものにする表現効果。＞とある。

［第二段　源氏、朝顔姫君を諦める］

*女五の宮の御方にも、かやうに折過ぐさず聞こえたまへば(光君は朝顔君へと同様に忌明けの見舞品を贈りなさったので)、いとあはれに(五の宮は感心なさって)、　*注に＜桃園式部卿宮の妹、朝顔の叔母。桃園式部卿宮邸に朝顔と同居。＞とある。

「この君の、昨日今日の稚児と思ひしを、かくおとなびて、訪らひたまふこと(御見舞下さるとは)。容貌のいともきよらなるに添へて(姿かたちがとても美しいのに加えて)、心さへこそ人にはことに生ひ出でたまへれ(気立てこそが人に優れて生まれついて御出でですもの)」

と、ほめきこえたまふを、若き人びとは笑ひきこゆ(若い女房たちは笑っていました)。

こなたにも対面したまふ折は(朝顔君とお話しになる時には)、

「この大臣の(源氏の大臣が)、かくいとねむごろに聞こえたまふめるを(このようにとても熱心に言い寄りなさっているようですが)、何か(何か不都合があるのですか)、今始めたる御心ざしにもあらず(今に始まった御心向きではないですし)。

故宮も(亡くなった御父宮も)、*筋異になりたまひて(思惑が外れなさって)、え見たてまつりたまはぬ嘆きをしたまひては(光君をお世話申し為されない事を嘆きなさっては)、*思ひ立ちしことをあながちにもて離れたまひしことなど(以前に御自分が進めようと御思いになった御二人の縁談を貴方がむやみにお断りになったことなどを)、のたまひ出でつつ(お話しになっては)、悔しげにこそ思したりし折々ありしか(残念でならないと御思いになっていた事が度々あったも

のです)。　*注に＜「筋異になりたまひて」は多義的内容を含む表現。『集成』は「（あなたが）斎院という神に仕える特別のご身分になられて、源氏を婿君としてお世話できないことをお悔みになっては」。『完訳』は「あのお方が他家の婿におなりになったので、こちらではお世話申すこともできなくなったとお嘆きになっては」と訳す。＞とある。　*「思ひ立ちし」の非敬語表現については、注に＜桃園式部卿宮の詞を引用。桃園式部卿宮が源氏を婿にと思っていたのを朝顔が強情に断ったという。＞とある。

されど、*故大殿の姫君ものせられし限りは(左大臣家の姫君が光君の正妻でいらした内は)、三の宮の思ひたまはむことのいとほしさに(姉上が成り行きを御心配なさるかと遠慮して)、とかく言添へきこゆることもなかりしなり(私は貴方に何も口添え申し上げる事も致しませんでした)。　*「故大殿(こおほとの)」は故太政大臣で、桐壺帝の御世の左大臣であり、その姫君は光君の最初の正妻であり、五の宮の姉である三の宮腹だった。読者から便宜上で「葵の上」と称されるその姫君は、今を遡る 21 年前の光君 12 歳の元服に共寝した 4 歳年上の時に 16 歳の新妻だった。そして、今から 11 年前に若君を出産した直後に 26 歳の若さでなくなった。朝顔君が斎院に卜定されたのは、明示は無いが 9〜10 年前と思われ、葵の上の光君の服喪を慮れば、五の宮が今まで口を挟む機会は確かに無かったかも知れない。尤も、光君の服喪は四十九日で、葵の上は秋の司召しの夜とは 8 月中旬に亡くなったので、10 月早々には 4 年前から幼児として囲っていたとはいえ 14 歳になっていた紫君を犯して祝言を挙げてしまうという血気盛んな若者ぶりを見せてはいた。時に光君 22 歳で、朝顔君は多分、18〜20 歳くらいだったと想定する。尤も、この朝顔君の年齢については不思議なくらい明示が無く、桐壺帝の妹宮腹の葵の上が桐壺帝の第二子である光君の 4 歳年上で、その葵の上の同腹兄も実は明示が無いが 6 歳ほど年上だろうと想定されるので、桐壺帝の弟宮の子である朝顔君も光君と同じ歳か年上の可能性も有るには有る。ただ可能性で言うなら、妹宮が相手次第で早く子を儲ける事情に比べれば、弟宮が兄帝に先んじて子を儲ける事情は少なさそうに思える。それと若い日の光君の性癖は、どうも年上に執心したようで、年少の紫君にも当初は藤壺宮の代替人形の役割を期待したのだろうから、朝顔君に対する儀礼と其也の愛想以上に然程は固執していないかのようなある種の淡白さは、同年かそれに近い年下を感じさせていた。そして、33 歳になった今の光君が改めて目を付ける相手なら、やはり少し年下が想定し易い。

今は、そのやむごとなく*えさらぬ筋にてものせられし人さへ(そのこの上なく高貴な上にも尊い血筋の正妻でいらした姫君さえ)、亡くなられにしかば(亡くなってしまっているので)、*げに(この上は)、などてかは(何の訳あって)、さやうにておはせましも悪しかるまじ(貴方が光君の正妻にお成りになられても悪い事があるものか)とうちおぼえはべるにも(と内心で考えておりました所にも)、さらがへりてかくねむごろに聞こえたまふも(光君が更に思い返してかく熱心に貴方に言い寄りなさるのも)、*さるべきにもあらむとなむ思ひはべる(そうなるべき御縁かも知れないと思っております)」　*「えさらぬ」は＜とてもそんなものではない＞だろうか。膨らませば＜そんな在り来りのものではない＞くらいにはなりそうだが、どうも単独で明確な形容をしている語には見えない。一種の定型化した強調句かもしれない。とすれば、それは当然に前の「やむごとなく(最上に高貴で)」に重ねて「えやむごとなき(より最上な)」となりそうだ。此処の文意は注に＜『集成』は「れっきとした正室で、のっぴきならぬ間柄でいらした方も。「えさらぬ」は、葵の上の母大宮が源氏の叔母であるという近い姻戚関係をいう」。『完訳』は「重々しく正妻の座にあった人、葵の上。「さへ」は、父式部卿宮はもちろん、葵の上までも、の気持」と注す。＞とある。が、「えさらぬ」の語自体に「近い姻戚関係」の意味は無いから、五の宮が自らの血筋の尊さをも自負して葵の上の＜高貴さを強調した＞理由を、注は「葵の上の母大宮が源氏の叔母である」事に拠ると説明しているのだろう。ただ、この葵の上の血筋は改めて考えてみると感慨深いものがある。葵の上は相当に自尊心が強そうに描かれていた

が、桐壺帝の妹宮腹であってみれば敬われて当然ではある。それも多くの宮家が尊敬される文化人であるのに比べても、この姫は左大臣家の、という事は藤氏長者の、姫であって出入りする家臣も数多く、尊敬される上に権勢まで振るう家柄で育ったのである。まして箱入りであってみれば、同等かそれ以下に扱う者は光君ただ一人だったに違いない。だとしたら、弘徽殿女御のような強烈な高飛車ぶりで無いだけでも儲け物と言うべきか。かと言って姫の気持ちが分かるわけではないが、4歳年下の従姉弟である光君に逆上せ上がるはずも無さそうだ。なお、「人さへ」の「さへ」は注に有るような並列強調ではなく、単体強調の＜人こそが＞の意味で「こそ」では貴人に対して失礼な語感だから「さへ」としたものかと思う。　*「げに」は文頭の「今は」を受ける。　*「さるべき」は連語とあり、＜そうあるべき＞だから＜妥当な、当然の＞という形容詞であると同時に、＜順当なもの＞という一般名詞となり、曖昧表現としての＜順当な御縁＞を意味するらしい。

など(などと五の宮が)、いと古代に聞こえたまふを(如何にも古風に申しなさるのを)、心づきなしと思して(朝顔君は厭わしく御思いになって)、

「故宮にも(亡き父宮にも)、しか心ごはきものに思はれたてまつりて過ぎはべりにしを(そのような強情者と思われ申し致して来ましたものを)、今さらに、また*世になびきはべらむも(あらためて内大臣の許へ身を寄せ申しますのも)、いとつきなきことになむ(まるで辻褄が合わないことになってしまいます)」　*「世になびく」は、五の宮の「さるべきにもあらむ」に応えた言い方とは思うが、「世」が広い意味を持つので的確な言い換えを定め難い。かと言って「世」を言い換えないと、当時は多くの読者に広く認識されたであろう具体的な内容を投げ遣った文に成ってしまう。で、五の宮が持ち出した「世(前世の宿縁)」はそのままでは否定しにくいので、朝顔君は「世(内大臣の権勢)」に置き換えて交したのだろう、と読む。

と聞こえたまひて(と申しなさって)、*恥づかしげなる御けしきなれば(五の宮が気後れするほどの毅然とした朝顔君の御態度だったので)、しひてもえ聞こえおもむけたまはず(それ以上は五の宮も光君との婚儀をお勧め申しなさいませんでした)。　*「はづかしげなるみけしき」は＜朝顔君が恥ずかしそうにしている＞ようにも見えるが、「恥づかしげ」には＜こちらが恥ずかしいと思うほどに立派＞という語法があり、意味からして五の宮の＜気後れ＞に違いない。

宮人も(みやびとも、宮家の女房たちも)、上下(かみしも、上位の者から下位の者まで)、みな心かけきこえたれば(皆がこの縁談を期待申していたので)、*世の中いとうしろめたくのみ思さるれど(朝顔君は日々の暮らしを気の許せないひどく煩わしいものとばかりに御思いでしたが)、*注に＜『集成』は「（前斎院は、女房たちがいつ源氏を手引きするかもしれないと）毎日ご心配でいらっしゃるが。「世の中」は、男女の仲。源氏との関係をいう」と注す。＞とある。この文でも「世」という語の多面性を作者は利用しているようだ。女房たちが思う「世」は＜男女の仲＞であり、明確に光君と朝顔君の＜婚儀＞を意味している。が、朝顔君の思う「世」は敢えてその＜婚儀＞の意を避けて、＜日常＞を意図しているのだろう。

かの*御みづからは(当の内大臣御本人は)、わが心を尽くし(真心を以って)、あはれを見えきこえて(誠意を訴え申して)、人の御けしきのうちも(朝顔君の御様子が心から)ゆるばむほどを*こそ待ちわたりたまへ(打ち解けるのを待ち続けなさいましたが)、さやうにあながちなるさまに、(それ以上に女房の手引きで寝所に押し入って力ずくで体を奪って)*御心破りきこえむなどは(根負けさせ申そうなどとは)、思さざるべし(お考えに為らなかったようです)。　*「おんみづから」は注に＜源氏をさす。『集成』は「以下、草子地。前斎院側に立っているので「かの御みづからは」という」と注

す。＞とある。　*注に＜係助詞「こそ」--「たまへ」已然形は、逆接用法。＞とある。　*「こころやぶり」は「破り」だと＜失恋＞みたいな語感だが、「敗り」だと＜根負け＞の語感。